

埋文にいがた

No. 56
2006. 10. 16

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

18年度発掘調査遺跡の紹介

た や みち 田屋道遺跡

(岩船郡神林村大字九日市字堂田ほか)

田屋道遺跡は荒川の右岸に広がる低湿地部に位置します。遺跡の周囲には関根川、百川、石川などの小河川があり、これらの河川は合流して旧岩船潟に注いでいたものと思われます。

調査は、日本海沿岸東北自動車道建設に伴い今年4月に開始し、現在調査中です。発掘調査面積は8,560㎡になります。

検出した遺構は、^{ほったてばしらたてもの}掘立柱建物18棟、井戸22基、溝56条、^{どこう}土坑31基、墓1基、^{さく}柵列1条、ピット347基です。出土した遺物には、^{すず}珠洲焼、^{とこなめ}常滑焼、中国陶磁器（白磁、青磁、青花）、^{すえき}須恵器、^{はじき}中世土師器、^{はし}箸状木製品、^{くい}杭、^{しっき}漆器皿・^{わん}碗、^{まげもの}板状木製品、^{まげもの}曲物、^{といし}砥石などがあります。田屋道遺跡の時期は鎌倉時代（12世紀末～13世紀が中心）と考えられます。

調査した遺構の中には墓と考えられるものがあります。平面形は方形で、規模は1m×70cmです。穴の内側を板材で囲っています。底板の上にはこれに直交するように棒状の材が二本並べられています。一方は樹皮が被ったままのもの、一方は樹皮がない棒状で両端がやや細くなっているように見えます(写真1)。内部の北側中央に木製の数珠玉が73個、中国の元朝の通貨で「至大通宝」^{しだいつうほう}（初鑄1308年）が1枚出土しています(写真2)。南側には漆器の碗が伏せた状態で出土しました(写真3)。銭貨の年代から墓は14世紀以降のものであることが推定できます。このような構造を持った墓は、近くでは新発田市住吉遺跡と阿賀野市大坪遺跡が知られています。

(株)シン技術コンサル 大島秀俊)



1 墓(SX313) 検出状況



2 中国銭貨と数珠玉



3 漆 碗

きんせい にいがた まちあと ひろこうじ ぼり
近世新潟町跡(広小路堀地点)
 (新潟市本町通十番町ほか)

近世新潟町跡は江戸時代初めに信濃川左岸の河口に近い中州に計画的に作られた港町です。一般国道7号万代橋下流橋事業に伴って、6月から本格的な発掘調査を行っています。

近世新潟町跡は江戸時代の明暦元年(1655)に現在地に移転しました。移転前は現在よりも浜手の砂丘地にあつたらしく、信濃川左岸を港として利用していました。想定される近世新潟町跡の範囲は東西約2km南北約0.5kmと広大です。広小路堀地点は幅四間の広小路堀があり、その両側には幅三間の小路と町屋が建っていました。今回の調査地点は、広小路に面して建つ町屋の屋敷地の一角です。

遺構は、十字に組まれた礎板(建物の沈下防止に柱や礎石の下に敷いた板)に縦長の礎石が乗る建物跡(写真1)や焼いた礎板を利用した建物跡、ほかの建物の礎石を再利用したため形や石材の異なる礎石の建物跡などがみつかっています。また、屋敷の境には現在の町境に重なる形で溝(写真2)がみつかっています。ほかにはゴミ穴とみられる土坑や火災の跡とみられる焼土などがみつかっています。

遺物は移転直後のものは少なく、18世紀代の肥前系(現在の佐賀県周辺)陶磁器の碗・皿(写真3)・香炉・鉢・水滴などが多く出土しています。これらの多くは北前船で運ばれたと見られます。木製品では、漆器の碗や箸、曲物などが出土しています。金属製品では銭貨の「寛永通宝」や和釘、煙管などが出土しています。土製品では福助・狛犬(写真4)などの土人形や泥面子、翁の根付などが出土しています。石製品では、阿賀野川や信濃川などの河川の舟運を利用して運ばれたとみられる西会津地方の緑色凝灰岩の切石、妻有地方(十日町市・津南町)から運ばれたと見られる安山岩の礎石などが出土しています。

今回の近世新潟町跡の調査範囲は狭く、明らかになったことは断片的です。今後の調査では調査範囲や調査方法の検討が必要と考えています。

(佐藤友子)



1 礎板と礎石



2 白線屋敷境の溝
家の切れ目が現在の町境



3 伊万里焼・染付皿(19世紀〜)



4 土人形(左:福助、右:阿形狛犬)

やしきわりつけ
屋敷割付遺跡
(上越市大字戸野目古新田字屋敷割付ほか)

屋敷割付遺跡は国道253号上越三和道路の建設に伴い、4月から7月にかけて12,630㎡を対象に発掘調査を行いました。遺跡は新潟県南西部に位置する高田平野を流れる関川右岸約2.5kmに位置し、遺跡の東端にはその支流である戸野目川が北流しています。標高約7mを測り、周囲には水田が広がっています。

調査により、9世紀中頃の須恵器や土師器がコンテナ約10箱出土し、中には土器の底部に「十」と書かれた墨書土器も含まれていました。

また、川跡1条、溝3条、土抗16基、井戸2基、ピット2基などの遺構が検出されました。川跡は幅4～5m、深さ1.2m、長さ35mにわたり、遺跡北西端から、南東方向に遺跡を二分するかたちで検出されました(写真1)。これは遺跡の北西約500mに位置する越前遺跡(上越市教育委員会が平成10、11年度に発掘調査)の川跡と連続するものと推測されます。越前遺跡では川底から多量の土器のほか木製品も多く出土していますが、屋敷割付遺跡では平安時代の須恵器・土師器が数点出土したに過ぎません。うち一点は精良なつくりの須恵器で佐渡小泊産の可能性がありますが(写真2)。

特に注目される遺構として14基の性格不明遺構があります(写真3・4)。これらのほとんどは長径2～3m、短径1～2m、深さ0.5mの楕円形または隅丸方形の土坑で、ほぼ垂直に掘り下げられています。これらの遺構は、川跡を挟んだ2か所にまとまって検出され、一気に埋めもどされています。また、掘立柱建物などの居住スペースも隣接して検出されていません。これらの特徴から、遺構は当時の「墓」あるいは「ゴミ穴」等であった可能性が考えられます。

今後、調査結果をもとにこれらの遺跡全体の性格、周辺の遺跡との関連等を明らかにすることが課題です。
(入江清次)



1 川 跡



2 須恵器出土状況



3 性格不明遺構



4 性格不明遺構断面

いわのはら 岩ノ原遺跡

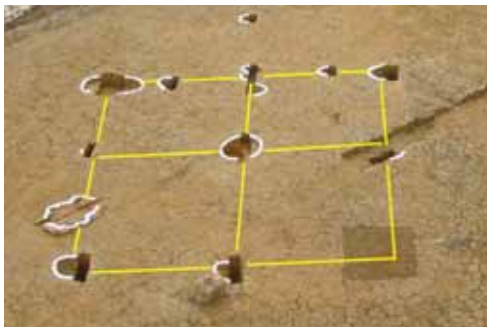
(上越市大字向橋字内沖303番地1ほか)

岩ノ原遺跡は高田平野の西部に位置し、儀明川右岸の沖積地に立地します。現地表面の標高は、約21mを測ります。北陸新幹線の建設に先立ち、5月から本格的な発掘調査を行なっています。

これまでの調査で、奈良時代から平安時代の遺構・遺物が見つかっています。遺構には掘立柱建物、溝、土坑などがあり、遺物には8世紀後半から9世紀中頃と思われる土師器・須恵器があります。なかでも「石井庄」、
「石庄」などと書かれた墨書土器が多数認められ、天平勝宝五年(753)には成立していたとされる「東大寺領石井庄」に関連する集落遺跡であることが分かりました。

さらに今後の調査成果が期待されています。

(高橋保雄)



掘立柱建物



「石井庄」と墨書された須恵器杯

にしごう 西郷遺跡

(新潟市茅野山3丁目2097番地1ほか)

西郷遺跡は国道49号亀田バイパスの拡幅工事に伴う平成16・17年度の試掘調査によって発見されました。試掘調査により、西郷遺跡は現地表面から約25cm下に古代の遺物、約180cm下に弥生時代の遺物を含む土が堆積していることが明らかとなりました。上層の古代と下層の弥生時代の遺物を含む土の間には、約180cmの厚さで遺物を含まない砂が堆積しています。

西郷遺跡の調査は7月から開始し、現在上層(古代)の調査を終了したところです。上層の調査では井戸・土坑・溝などが検出されましたが、住居跡はみつかりませんでした。西郷遺跡の所在する新潟市域には海岸に平行して砂丘列が10列あまり形成されており、現在の住宅の多くは砂丘列の上に建てられています。これは古代についても同様で、集落跡の多くは砂丘上で発見されています。これに対して西郷遺跡の立地は砂丘列と砂丘列の間の低い土地で、現在は水田に利用されています。調査では井戸や須恵器壺・土師器無台碗などの生活用品が出土する土坑などが検出されているので、立地条件とあわせて考えると、古代の集落の外れに当たるとはならないかと思われます。

(土橋由理子)



遺跡全景



土師器甕・須恵器壺

中部北遺跡

(岩船郡神林村大字牛屋字中部1048ほか)

中部北遺跡は海岸砂丘の内側に形成された沖積低地に立地する遺跡です。発掘調査は日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、平成18年4月から8月に実施し、3,620m²を調査しました。

発掘調査では、標高2m前後に堆積する灰色粘土層上で土坑・溝状遺構・炭化物集中地点を検出し、そのほか川跡なども見つかりました。また、遺構や遺物の大半は当時の川の北側に形成された自然堤防上で発見されています。遺物包含層からは縄文時代中期～後期の土器や石器が出土しました。石器には漁網に使う石錘、狩りに使う石鏃、土掘り具とされる打製石斧などがあります。今回の調査では集落の確認には至りませんでした。本遺跡のある神林村では低地部における縄文時代の様子はほとんど知られておらず、中部北遺跡は当時の人々の活動痕跡を示す貴重な遺跡といえるでしょう。

(株)吉田建設 継 実



検出された自然流路



縄文土器

西部遺跡 (05北区)

(新潟県岩船郡神林村大字牛屋字西部地内)

本遺跡は神林村と荒川町境を流れ日本海に注ぐ荒川右岸の沖積低地に位置しています。調査は日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、今年4月に開始し、現在調査中です。発掘調査面積は7,180m²になります。

遺跡の時代は中世と古代です。中世の生活面では遺構・遺物の検出は少なく、古代が中心の遺跡です。古代では遺物が集中出土する場所があり、その周辺からはたくさんの杭を検出しました。杭は直径数センチという細さですが、列として並んでいるものも見られます。集中して出土した遺物には、土師器や須恵器といった土器や板状の加工木製品、砥石などが見られ、そのほかクルミや桃の種といった種実も出土しています。土器の表面には墨で文字や記号状の模様を書いたものも出土しましたが、大半の土器が小さく割れた状態で出土していることから、廃棄されたものではないかと考えられます。まだ調査途中のため、杭列の性格や多量の遺物の存在がどのような意味を持つかということは分かっていませんが、今後の調査で解明したいと思っています。

(大成エンジニアリング(株) 作田一耕)



出土遺物散布状況(南西から)



杭検出状況(南から)

埋文インフォメーション

新資料展 展示替えのお知らせ

埋蔵文化財センター入口エントランスに展示している平成16年度発掘調査遺跡出土品を、10月から入れ替えます。今回の展示資料は、^{ひるづか}昼塚遺跡(縄文晩期)、^{にしかわうちみなみ}西川内南遺跡(古墳前期)、^{みつまた}三角田遺跡(奈良・平安)、^{にしかわうちきた}西川内北遺跡(奈良)、^{おおつば}大坪遺跡(平安時代末～鎌倉)の5遺跡です。この機会に貴重な資料をぜひご覧おき下さい。



昼塚遺跡



西川内南遺跡



三角田遺跡



出前授業紹介

毎年当センターの施設を利用して小・中学生が体験学習を行っています。事業団の職員が直接学校に出向いて授業のお手伝いをする「出前授業」も行っています。小学校は石器体験や火おこし体験、土器作り体験などの体験活動を希望する学校が多いです。中学校では実物資料や写真パネルを用いて、社会科の授業をチームティーチングで行うこともあります。これ以外の学習内容についても可能な限り対応します。下記担当へご相談ください。なお、センター利用の体験学習同様、事前の申込が必要です。

問い合わせ 調査課普及担当 小菅



新潟市立赤塚中学校(社会科授業)

平成18年度出土品展のご案内

平成18年度出土品展を下記の内容で実施します。多数のご来場をお待ちしています。

- 1 期 間 10月12日(木)～11月12日(日)
- 2 会 場 糸魚川市青海総合文化会館
(きらら青海1階ギャラリー)
- 3 展示品 平成17年度発掘調査遺跡出土品
糸魚川市教育委員会発掘調査遺跡出土品
- 4 その他 発掘調査報告、展示解説
11月5日(日) 13:15～
- 5 問い合わせ

調査課普及担当 三ツ井



ポスター(糸魚川市)



出土木製農具についてー現代との比較からー

近年の発掘調査では、低湿地の調査によって保存状態が良好な木製品が多く発見されています。これは、低地では木材や植物の種実など腐食しやすいものが、空気に触れず腐りにくい環境にあるためです。

今年度は古墳時代の農具について、特に「大足」と「鋤身(または鋤身)」について2回に分けて紹介します。

大 足

大足は水田で使用する田下駄の一種で、長さが60cmを超える大型のものです。

用途としては二つの機能があります。一つ目は、ぬかるむ田や沼に埋もれないように、足の裏の面積を増すための機能、二つ目は、代かき、その後の田均しなど田植え前に水田の代こしらえをする道具としての機能です。簀の子型、枠型、箱型など、概して大型で、「オオアシ（オーアシ）」と呼んでいた地域が多いようです。現在のように機械化された農作業では、なかなかその使用法は分かりづらいものです。

土居下遺跡の例

土居下遺跡で発見された「大足」は2個一対のうちの片方のみで、水田遺構の中から出土しています。古墳時代の遺物を含む土層から出土しました。

大きさは長さ80cm、幅30cmで、細い木枠で作られています。同じ場所で、前・後の先端が細く尖った足板も出土しました。この足板は「大足」の中央に置かれ、横木のホゾ孔に差し込まれていたと考えられます。縄などは確認できませんでした。



土居下遺跡「大足」

佐渡の「大足」

ここでは昭和40年代まで佐渡国中平野で使用され、現在、佐渡博物館に保管されている「大足」を紹介します。大きさは長さ74cm、幅32cmで、角材を組んでいます。中央には長さ30.4cm、幅8.8cmの足板があり、これには鼻緒が付きます。足板には足型が明瞭に残っています。前部には縄が三本あり、それを手で持ち、足を持ち上げるときに引っ張り上げて足の動きを補助しました。

佐渡では「大足」だけでなく、ヒッパリ石と呼ばれる大きな石もこれらの作業に使用していました。ヒッパリ石は人頭大のものから40cm大の大きなものまであります。一方に綱を通すための孔が空けられていて、田植え前に、水田の中で数人が綱のついた石を引き回します。大きいものは牛や馬で引きました。大石を引くことにより、水田の地盤をならし、水田面の基盤面を固める効果があります。その後「大足」をはいて、水中の耕作面を平らにならしていくのです。

ここが違う!

佐渡の「大足」と土居下遺跡から出土した「大足」を比較してみると、後者は鼻緒を用いず、足板に乗せた足を縄で固定して装着するという点で違いがあります。しかし、これ以外は非常によく似ています。古墳時代から昭和まで約1,500年間、「大足」はほぼ同じ形で使用されていたことが分かります。

(調査課資料担当：山本 肇)



佐渡博物館所蔵の「大足」



「大足」の使用法



ヒッパリ石

県内の遺跡・遺物54

^{け ほう じ} 華報寺墓跡出土品（昭和51年 県指定）

遺跡所在地：阿賀野市大字出湯809

華報寺は^{で ゆ}出湯集落の奥まった中央の一角に位置し、温泉街や民家が門前町の形態をなしています。華報寺は文明9年（1477）、村上^{こううん じ}の耕雲寺六世大安梵守によって再興された曹洞宗の寺院ですが、それ以前から格式の高い寺院であったことが文献や出土遺物・遺構などから確認されています。現在の出湯集落の大半は当時の寺領にあたり、伽藍^{がらん}の敷地内であったと考えられます。

華報寺周辺の山林や扇状地は墓域となっており、明治38年に南側急斜面の旧普賢堂跡から青銅製蔵骨器^{ぞうこつ き}他が発見されました。銘文から三代素^そ和^わ尚^{しょう}の蔵骨器であることがわかりました。（昭和27年新潟県指定文化財工芸品に指定）また、昭和38年にはこの遺構の末端の高阿弥陀^{びやう}仏廟^{びやう}の北隣で蔵骨器（写真1）とその内部に納められていた青銅製経筒^{きやうづつ}（写真2）が発見されました（昭和51年新潟県指定文化財考古資料に指定）。

平安時代の終わりから、人々の間では釈迦の死後2,000年後に仏教が衰えるという末法思想が広がりました。この思想から来る危機感から、弥勒菩薩^{みろくぼさつ}が出現してこの世を救うまで、仏教の經典を伝え残すことを目的として、書き写した經典を寺社の境内や眺めのよい丘の土中に埋めることが流行りました。經典は銅製の経筒に入れ、さらに陶器などに納めて埋められました。

この経筒の発見を契機に、翌昭和39年に周辺の発掘調査が行われ、珠洲焼の壺を伴った4基の墳墓と石棺が確認されています。

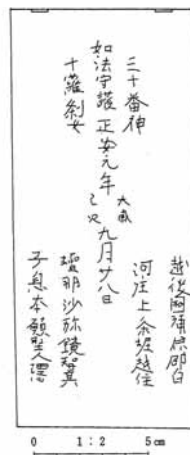
〈注：写真3～6は昭和27年（追昭34）に指定された工芸品9点の内の4点〉

写真協力：川上貞夫氏

資料提供：阿賀野市教育委員会



1 蔵骨器（甕）と蓋（片口）



経筒銘文



2 青銅製経筒



3 銅製仏像



4 銅製経筒（蔵骨器）



5 瀬戸焼合子



6 銅製和鏡

埋文にいがたNo.56

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
 〒956-0845 新潟市金津93番地1
 TEL (0250) 25-3981
 FAX (0250) 25-3986
 e-mail: niigata@maibun.net
 URL: http://www.maibun.net
 印刷 阿部印刷株式会社